

## 第一編 日本-インド-ケニアを結ぶ赤い糸

2002年と2003年の年末年始の話題を独占したケニア大統領選挙は、騒乱状況を憂慮し外国人の出国等を引き起こしたが、大きなトラブルもなく無事に終了しました。選挙当日には整然と投票を待つ人々の列がテレビに映し出され、印象的でした。かくして昨年(2002年)12月30日には、新大統領の就任式をテレビで見ることができました。各方面のコメントも、大統領が平和的に選出されたという事実に高い評価を与えていたと思います。私は、ケニアの歴史のひとつの転換点であろうと思われる事象の証人となれたことに、興奮に似た高揚を感じました。私の実感は、ケニア人の良識と民主主義的感覚のそれなりの浸透ということ。もう一つは、国際社会の目。東アフリカの中心としてのケニアの政権の安定を、特に英米が強く望んだということがあるのではないかと思います。ともあれ、NARC (The National Rainbow Coalition) のムアイ キバキは大統領となりました。それがいかにすばらしい変化であるかについては、30万とも50万ともいわれる大衆がウフル公園に集結し、新大統領の就任を祝い、モイ大統領からの権力の移行 (Hand-over) を見つめたあの意気込みや、ジンバブエ、ウガンダ、タンザニアの元首達、南アの代表が祝いに訪れる姿は、アフリカ人の力でアフリカ人の平和を確立しようとしているかのような高揚を分かち合いました。ブラウン管の中に浅見日本国全権大使が、キバキ新大統領に近いところに写っておられました。無論、日本がケニアのために経済支援 ODA(Overseas Development Assistance)を実施してきたことは誰もが知っています。私は、もうひとつのケニアとインドと日本のつながりを思い出していました。それは第二次世界大戦に遡ります。

ある本に興味深い記述があった。英領インドの独立のくだりで、日本軍が英軍をシンガポールからマレイ半島、そして英国支配の最大の植民地インドのメガラヤ州近辺まで脅かす勝利を収めた時(インパール作戦初期)に、インド人は英国からの独立を可能なものとして捉えることができたという。つまりインド人は長い英国の支配から日本によって解放の切っ掛けを与えられたことになる。特に祖国の武力解放を目指したチャンドラ ボース (Chandra Bose) の国民軍(自由インド軍)は、東条英機(当時首相)との間でインドの独立支援の密約を結んでいたといわれている。今でもチャンドラ ボースの名前は、カルカッタ空港の名前として残っており、また彼の誕生日は西ベンガル州の休日となっている。しかし英国は1944年には、再び日本軍を追い詰め、世に言うインパールの地獄といわれた日本軍の敗走となるが、そのときの英国軍の主力には東アフリカの若者が多く参加していたことはあまり知られていない。戦後の東京裁判で連合国の一員であったインドが常に法の平等と正義を主張し、日本の戦犯の裁判の公平を訴えていたことはよく知られた事実である。また英国軍として日本軍を敗走させた東アフリカの若者たちは、インドの独立

運動を目の当たりに見ることになり、その影響を受けて復員し、戦後少なからずアフリカの独立に力を尽くしたようである。彼らは、インドに出征するまでは、独立とか愛国心についての、明確なイメージを持っていなかった。日本がインドの独立を助け、インド人はその独立の意味をアフリカの兵士に伝え、そのアフリカの兵士たちが、終戦後自国の植民地的な地位からの解放のために自覚的な市民として活躍したとしたら、日本が間接的には、戦勝国イギリスやフランスの植民地支配の打破に、影響を与えたことになる。そしてその東アフリカの兵士たちはイギリスのインド洋の要港モンバサからその多くが出ていったとすれば、日本—インド—東アフリカそしてケニアの流れを感じることができる。私は、ブラウン管のモイやキバキの顔を見ながら、赤い糸を手繰り寄せてみた。

ケニアの復員兵士は、復員したものの、故郷に見たものは、昔と同じ、あるいはそれ以上に人種差別や種々の制限の存在だった。海外出兵で得た見聞は、彼らが置かれた白人に対しての従属的地位を認識するのに大いに役立った。後にケニアの『マウマウ』の反乱指導者の一人となったワルヒユ=イトテは、インドに出征した折に独立運動のために闘う政治家を直接見、インド人の女性にイギリスがインドの独立を約束した事を聞かされ、あなたは何のために闘っているのかと尋ねられて、自らの置かれた『傭兵の地位』に疑念を持つようになったと述懐している。復員兵士たちは、このように戦争体験により意識革命を行った者が多く、除隊になってからも、それぞれ出身の植民地において、復員兵士組合（ゲダン=キマニが中心となった）や事務員・商業労働者組合（ビルダッド=カギアが中心となった）などの組織をつくり、その当面の目的を、職業の確保や大戦直後の物価値上げ反対運動などの経済闘争においていたが、次第に強力な政治活動を行うようになっていった。

ケニア独立運動で忘れてはならない事象に、秘密結社『マウマウ』の反乱があるが、その母体となった政党は KAU (the Kenya African Union ケニア・アフリカ人同盟) であり、その党首が今も『ケニアの父』と尊敬を集めている初代大統領ジョモ=ケニアッタである。彼はマウマウの嫌疑から9年の間投獄された。彼が牢獄に繋がれている間、マウマウの弾圧、イギリスの統治政策の転換、1960年の KANU (the Kenya African National Union ケニア=アフリカン民族同盟) の設立と歴史はヒタヒタと進み、1961年8月、ケニアッタの9年ぶりの出獄と KANU 総裁への就任という劇的展開をむかえる。1963年5月総選挙を実施し、KANU の大勝利を背景に、6月にケニアッタを首班とし内閣を組織し、ケニアは1963年12月12日独立を達成している。

今約40年にわたった KANU のケニアッタとモイの時代を終えて、新しい政党 NARC のキバキ大統領にバトンが渡されたわけですが、このキバキとて1978—1988の間モイ政権の副大統領として KANU の重鎮であった人物です。年齢もモイとさほど離れていないこともあり、今回の政権交代は古いものから古いものへの交代に過ぎないと批評する

向きもあるようです。

さて、私の言いたいのは、復員兵士に繋がるインドからの赤い糸の流れ、反植民地闘争から独立への流れの先に明らかに日本の働きがあったということです。そして3代目の大統領が野党であった NARC を背景にして選出された事で、ケニアの新しい流れが生み出したことを、共に祝いたいと思います。そしてその動機や狙いはともかく、歴史的な結果を評価するならば、間接的でも、嘗て、日本がケニアの新しい歴史のページをめくるために、やったことがあったのだということを思い出すこと。それを認識しつつ、国際交流を進めていくことが大切だと思います。

《参考文献》

- ② アフリカ現代史 II 吉田 昌夫 著 山川出版社
- ② 100問100答『世界の歴史2 中東・アフリカ』歴史教育者協議会編 河出書房新社